

令和2年度 北海道教育大学旭川校教員養成課程  
編入学試験問題（国語教育専攻）

## 小 論 文

### 注 意 事 項

- 1 問題用紙は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題は、問1および問2の2問があります。必ず2問に答えなさい。なお、答えは解答用紙を用い、横書きとします。
- 3 問1は、解答用紙の枠内に図示しなさい。問2は、解答用紙の字数内でまとめなさい。
- 4 下書き用紙は、表裏とも自由に使用してかまいません。試験終了後に、解答用紙とともに提出しなさい。
- 5 小論文の問題用紙は、試験終了後、持ち帰りなさい。

令和元年11月24日

【問題】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「聞く」に限らず、さまざまな仕事や行為において、技術があることと、能力があることは同じなのであろうか。簡単に言えば、「聞く技術」はなくても「聞く能力」があればいいのではないか。ここで問題はその技術と能力は同じものなのかどうかである。あるいは、技術が分節的に捉えられ、育てられなければ、能力は身につかないのかどうかである。

サッカーなどで、「ボールを扱う技術は一流だ」といったとき、その次に「しかし点を取る能力には欠ける」と続けられることがある。「点を取る技術」とはあまりいわない。サッカーでは「ボール扱いのうまさ」よりも「点を取る能力」があるほうが、選手としては優秀である。が、点を取る能力がある選手が、その能力を分析的に自覚しているかといえ、そうでもないことが多い。「点を取るための技術」は、「ボールを扱う技術」を内包するが、決してそれだけではない。「それ以外の何か」は、「ゴールへ向かう気持ち、相手を恐れない気持ち」などのように、「技術」で語られにくいものであったり、「ゴールの位置を捉える嗅覚」のような表現で語られるものであったりする。

そのように考えれば、「聞く技術」と「聞く能力」は、決して同じではなく、結果的にほしいのは「聞く能力」であると、私は考える。

安彦忠彦氏は、知識と能力との関係をさいころの形で示された。縦・横・高さの各辺の軸に、

- ・ 知識-態度
- ・ 精密測定可能-精密測定不可能
- ・ 顕在-潜在

という指標をとり、その総体を能力という。「知識、精密測定可能、顕在」にあたる「能力の一部」が「学校で系統的、計画的に指導される」という能力観・学力観である（『新学力観と基礎学力』安彦忠彦 明治図書 一九九六）。ここでいう「知識」は、「技能」を含め、「知識・技能」という形で考えてよいものと思われる。

先のサッカーの例で言えば、「知識・技能、精密測定可能、顕在」にあたる場所に「ボールを扱う技術」があり、もう少し「態度、精密測定不可能、潜在」の方向に広がった範囲の能力として「点を取る能力」があるということである。

少し話題を横道にそらした感がある。しかし、「聞く技能」といったとき、能力と技能の関係がある程度明らかにしておかないと議論は前に進まないと考え、駄弁を弄したしだいである。

「能力」を支える「技術」は必要である。聞くことについては、その能力も技術も、これまで明確に捉えられてきたわけではなかった。捉えられたとしても、「電話で用件を聞く」などの具体場面の「能力」として位置づけられたり、「話の中心を捉えて聞く」などのように、「技術」なのか「能力」なのか、あるいはただの「学習内容」なのかわからないような捉え方だったりしてはいなかったか。

早い話、「話の中心を捉えて聞く」といったとき、ではどうすれば話の中心を捉えられるのか。その具体の「技術」が明らかでなければ、話の中心を捉えることができるように指導することはできない。

それは実は「読み」の能力においても近いものがあり、「この場面の主人公の心情を捉えよう」といったとき、どういうところに着目し、どういう筋道で考えたらそれがわかるのかは、必ずしも明確ではない。

だからこそ、その「技術」を明らかにする研究と、その「技術」を育てる実践が求められるのであろう。科学は未知を既知に変えようとするものであるから、「技術」を明らかにしようという研究的方向性には蓋然性がある。

ただ、繰り返しになるが、問題は、「技術」をどういうものだと考えるかということである。学校教育の実践においては「能力」も含めて「技術」だというのであれば、異論をさしはさむ余地はない。しかし、「技術」といったとき、一般には、「こういうことができれば、『話の中心を捉えて聞く』ことができる」という「こういうこと」を念頭におくであろう。「手の着き方をきちんとできれば、跳び箱が飛べる」というときの「手をきちんと着くことがわかる・できる」というのが「技術」である。

そのように考えたとき、私たちは聞くことについて「技術」という意識で能力を捉えてきたらどうかという疑問がわく。私自身、人の話を聞くときに、「こんなことに気をつけて聞いたらよくわかる」などと考えたことはない。このことについて、もしかして私は特殊な認識をもっていて、ほかの人はみんな「こんな技術を身につけたら人の話をきちんと聞けます」といえるのだろうか。「この人は何か言いたいのだろう」「さっきの話題と今の話題はどういう関係があるのだろうか」「さっき投げかけられた疑問の答えはなんなのだろう」などと、話がわかりにくくなってきたときには考えることはあるが、それ以上のものではない。また、難しそうな話のときは、「ひとつだけでも質問をしよう」という身構えで聞くことがあり、それは効果を発揮するが、それらの私の自覚的な意識を「技術」というのであろうか。

また逆に、「どんなことに気をつけたらきちんと聞くことができますか」と講演会の前に尋ねられたらどう答えるだろう。「しっかり聞きなさい」では話にならない。「話し手の言いたいことは何かを考えながら聞きなさい」ではあたりまえすぎて答えにならない。「話の切れ目に注意して聞きなさい」であれば、なるほどとひとまずは思われるかもしれないが、それできちんと聞けることにはならない。私ならこう答える。

「」

(三浦和尚『国語教育実践の基底』による)

問1 下線部「安彦忠彦氏は、知識と能力との関係をさいころの形で示された」について、以下の問いに答えなさい。

(30点)

(1) 安彦忠彦氏が示した知識と能力との関係はどのようなものであったと考えられるか。解答用紙に安彦氏が示したと考えられる図を描き、以下の①～⑥の語がその図のどこに位置づくのかを示しなさい。

- ① 知識                      ② 態度                      ③ 精密測定可能                      ④ 精密測定不可能  
⑤ 顕在                      ⑥ 潜在

(2) 安彦忠彦氏の図において、筆者は技術と能力とがどこに位置づくと考えているか、それぞれ図に示しなさい。

問2 文章末尾の空欄について、あなたならどう答えるか。その答えを明確に示すとともに、そう答える理由を、以下の条件を満たしながら800字以内で述べなさい。

(70点)

[条件]

- (1) あなたは技術と能力とがどのような関係にあると考えているかを示すこと。
- (2) あなたが考える技術と能力との関係がよくわかる、サッカー、聞くこと以外の具体例を示すこと。
- (3) あなたの答えがなぜよいと考えられるのかについて、「技術」、「能力」の語を用いながら説明すること。